

多文化保育のエスノグラフィー
「多文化共生」の歴史から現在の実践を読み解く

長江侑紀

A Study of Multicultural Preschool Education and Care
Describing Practice of “Multicultural-Coexistence” from Historical Perspective

Yuki Nagae

Author's Note

Yuki Nagae is a PhD student at the Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

This article examined a historical background of multicultural education at the nursery school and the concept of ethnicity in the context, as one part of a research project, which studies a preschool education for cultural diversity through five-year fieldwork at a nursery school in Japan. This nursery school has been home for people from culturally diverse backgrounds and aimed for “multicultural-coexistence” for half a century in modern and contemporary Japanese society. They have experienced a transition from “ethnic education” mainly for Korean residents of the past colonialism to “multicultural-coexistence education” influenced by the increase of new-comer immigrants. The current pedagogy for including cultural diversity on site has been built up in such historical transition and civil movements in the region, and the teachers recently have been looking for a practice to capture the complex and multi-layered ethnic identity of children with immigrant backgrounds, by using “roots” as a social category. By focusing on this nursery school as a case study, it was shown that it is possible to discuss the historical and social context of migrants and ethnic minorities in Japan in the field of early childhood education and care. It will continue to be important to consider childcare and educational practices including culturally diverse children with this perspective.

Keywords: Multicultural-Coexistence, Ethnicity, Historical Perspective, Multicultural Preschool Education, Qualitative Study

キーワード：多文化共生，エスニシティ，歴史的観点，多文化保育，質的研究

多文化保育のエスノグラフィー

「多文化共生」の歴史から現在の実践を読み解く

1 はじめに

近年、文化的多様性へ開かれた社会としてますますの進展が予想される日本では、多文化共生の問題は今まで以上に大きな課題であり、それは乳幼児期の子どもや子育て家庭を対象とする就学前教育・保育施設においても例外ではない。出生総数が 2016 年に 100 万人を下回った少子化の日本で、うち少なくとも一方の親が外国籍の子どもは 3.5 万人を越し、その割合は年々増加している⁽¹⁾。その数は、2018 年には生まれた子どもの 27 人に 1 人の割合である。

しかし、多文化化する保育・幼児教育の既存研究には、多文化共生を考察するためのいくつかの問題が指摘できる。保育学領域で国際化や異文化理解についての研究が提出され始めたのは 1990 年代においてであり、その後も文化的多様性に焦点を当てた研究はいくつかの研究を除いて蓄積がない（例えば、品川，2011a，2011b；山田編著，2006）。ゆえに、隣接する教育学・教育実践研究や社会学研究などの他の領域においては検討される日本社会の移民やエスニック・マイノリティの歴史的・社会的文脈を踏まえた「多文化共生」の議論は、保育学研究ではあまり見られない。エスニシティについてマジョリティとマイノリティの関係を考慮した現場の実践や議論は少なく、品川（2011b）が指摘するように、これまでの保育は「単に外国人児童と日本人児童を共に保育するという実態」（品川 2011b：110）にとどまっていた現状もある。

そこで、本研究は、近現代日本社会の移民集住地域として文化的に多様な人々の「共生」を

半世紀にわたって模索する保育園（以下 A 保育園とする）に焦点を当て、現場の実践を検討することから保育における「多文化共生」の議論を立ち上げることを目指す。本稿では、具体的には以下の二つのテーマに取り組む。課題 1 は、事例の A 保育園の「共生」にまつわる歴史的背景を紐解くことをテーマに、主に資料調査を中心とした研究である。課題 2 は、そうした歴史の変遷の中で構築された多様性をまなごす姿勢がどのように実践に表れているかを主にインタビュー調査から検討する。どちらも約 5 年にわたる A 保育園のフィールド調査に基づく。それらの具体的な研究の説明は各研究論文に託すとして、本稿ではそれらの研究を合わせた時に指摘できる点を記す。

2 先行研究

2.1 文化的多様性を対象とする保育研究

まず、本研究が課題とする文化的多様性を考慮した保育を検討する研究を整理していきたい。

保育領域においては、ニューカマー移民の増加や「国際化」が社会的課題として顕在化した 1990 年代に、多文化・異文化の視点を持った研究が発表され始める。その後、2000 年代に入ってやっと、多文化社会の中の保育として関心が向けられ、2004 年に開催された日本保育学会第 57 回大会において「多文化共生社会における保育の課題と展望」と題してシンポジウムが行われている。

とはいえ、2000 年以降、保育領域で多文化共生を模索し、文化的多様な環境での保育実践を

描き出すことを試みた研究は、いくつかの研究（例えば、山田編著、2006）を除いて、数多くない⁽²⁾。保育現場の視点を反映させた 2000 年代の研究は、日本の就学前施設への参加が増加する「外国人の子ども」（久富、2004）や「外国籍の保護者と子ども」（萩原、2006）について検討し、そうした状況を総括するように、品川（2011b）は「単に外国人児童と日本人児童を共に保育するという実態」（品川 2011b : 110）と保育現場を描写した。

こうした文化的多様性について検討する保育領域の研究動向は、多文化化をごく近年の現象だと捉えたり、文化的多様性を国籍や言語に基づく本質主義的な枠組みで理解したりする認識枠組みを示唆する。しかし、現在課題とされている多文化化は近現代日本社会の課題であり続けているし、文化的多様性は人々の相互作用によって複雑に構築され、認識されるものである。そこで、本研究は、半世紀にわたって社会文化的背景の異なる人々の「共生」を模索してきた保育園を事例に、上記で指摘された二点について、歴史的背景を踏まえつつ、現在の保育における「多文化共生」のあり方を検討したい。

2.2 教育実践における「多文化共生」

以上では、保育学研究では文化的多様性を対象とした研究蓄積が浅いことが示された。しかし、隣接領域である教育学・教育研究では、日本社会の移民やエスニック・マイノリティの社会的文脈を踏まえた「多文化共生」の教育は一つの研究課題として長年議論されてきた。保育領域での考察に参照できるよう、多文化共生を目指した教育実践で検討する際に重要な点を整理したい。

「多文化共生」を考えると、在日コリアンな

ど旧植民地出身者にまつわるオールドカマーやエスニック・マイノリティの問題を忘れてはならない。「多文化共生」は多義的な概念であり、大きく区分すると、官製的な多文化共生と草の根の多文化共生がある。草の根の多文化共生は、例えば、川崎の在日コリアン集住地域でマイノリティのエンパワメントと差別への抵抗を目指した「共生」の市民運動がニューカマー移民の生活支援へと発展してきたように、市民活動による経験の蓄積が一つの系譜としてある（伊藤、2009；山脇、2009；金、2003、2006）。一方の官製的な多文化共生は、もっぱら近年の移民の受け入れによる日本社会の変容にのみ関心を向け、さらに、マジョリティや社会的構造の変容なくマイノリティの異文化適応を期待している点でその抑圧的な態度に批判が向けられている（高谷、2021；金、2011b；ハタノ、2006）。

「多文化共生」の概念を紐解いたときに顕在化する多文化社会としての歴史とマジョリティとマイノリティの関係性を考慮した際、多様な文化的背景を持つ人々が参加する教育現場での実践者の態度が問われてきた。近年は、「外国人」と「日本人」という二項分立に基づいた認識枠組みを乗り越え、「外国にルーツを持つ」などのより包括的なカテゴリー利用が普及しつつある。しかし、異文化理解を目的とした場合であっても、本質主義的なエスニシティ理解に基づいた教育実践は見られ、それらは外国にルーツのある子どもに周縁化されたアイデンティティを押しつけたり、マイノリティを抑圧するように働いたりすることが指摘されている（渋谷、2013）。

そこで、構築主義的な態度が必要とされるが、それはどのように可能かは今後検討が必要である。さらにこれは、実践者と子どもの関係が結

ばれる保育領域においても意義のある課題であるといえる。

3 調査概要

本研究では、社会制度として多文化共生を推進させてきた川崎市にあり、半世紀以上活動を続けてきた市民運動の拠点地域にある認可保育所の A 保育園を事例にする。

川崎の市民運動は、在日コリアンの集住地域である川崎市臨海部で発展した（金 2003, 2006 ; 金, 2011a）。運動の中では、国籍や民族に基づく差別撤廃を求めたことに加え、同化主義に抵抗しマイノリティである在日コリアンのエスニック・アイデンティティの確立を試みた。そこでは、在日コリアンと日本人の文化的に差異のあるものの「共生」が目指された。このように、在日コリアンを中心としながらも、マジョリティである日本人を巻き込みながら発展した市民運動は、川崎の「多文化共生」としての変遷を経る。

A 保育園の設立当初は、在日コリアンの集住地域において、社会的に抑圧・排除を受けていた人々に対して社会福祉を提供することを目指し、在日コリアンと日本人が通う保育園として「民族保育」を模索していた。民族保育で目指された「共生」は、川崎の市民運動のそれと方向性を共有していた。その後、1990 年代より増加したニューカマー移民の参加によって構成員が多様化していったことに加え、園の移転や社会状況の変容などを反映させる形で、「多文化共生保育」へ転換していった。A 保育園には 2021 年度には約 90 名の園児が通い、その 3 割以上を外国にルーツのある子どもが占めている。現在の保育方針の一つに「多文化共生」が掲げられている。

このように、A 保育園が置かれた歴史的・社会的文脈は、まさに草の根の「多文化共生」が構築される渦中に保育実践があったことを示唆する。また一方で、A 保育園は、そうした文化的多様性への対応を模索しながらも、認可保育所として養護と教育の実践も蓄積している。本研究は、A 保育園を対象とすることで、保育領域で視点が欠落していた多文化共生を踏まえた保育実践の考察を目指す。

また、本研究は、エスノグラフィック・アプローチで実施されたフィールド調査に基づく。エスノグラフィーの手法は、構成員の相互作用や活動を記述することで、「メンバーの固有の意味を捉える」（Emerson et al., 1995 = 1998）ことを目的としている。つまり、本研究は、単なる理論的な考察や海外からの概念の借用による「多文化保育」（品川, 2011b ; 萩原, 2006）ではなく、そうした理論と往還しながらもボトムアップで多文化共生を目指す保育を検討することを目指す。

このように、現場の実践や当事者の視点から考察を試みる本研究は、「多文化共生」を保育領域で検討する際に必要な視点を拾い上げる。具体的には、子育てニーズへの対応や子どもの発達支援が中心的である保育という日常実践に埋め込まれながらも、どのように文化的差異が認識され、多様性の尊重が実践されているのかを描き、それがどういった論理に支えられているのかを現場の人々の解釈から検討することを目指す。

本稿では、そうした研究全体のうちの一部として、本研究が事例とする A 保育園の「多文化共生」の実践を模索するに至る歴史的背景を踏まえつつ、A 保育園では社会文化的背景が

多様な子どもたちのエスニシティをどのように捉え、「多文化共生」を目指す包摂的な実践を行おうとしているのかを検討した研究を課題 2 とし、それぞれの概要を報告する。

4 課題 1：歴史の変遷

課題 1 の研究では、文化的に多様な子どもの保育実践について半世紀以上の経験がある A 保育園を事例に、人々の社会文化的背景はどのように理解されてきたか、異なるエスニック背景の人々の「共生」はどのように、そしてなぜ目指されたかについて、地域の市民運動や当時の保育実践が記された資料を参照しながら、「多文化共生」の歴史的観点から検討した。

市民運動との相互作用と構成員の変容の中で、A 保育園では「民族保育」から「多文化共生保育」への実践の変遷があった。本研究では、構成員のエスニック背景の変容や、保育園に影響を与えた社会的事象や地域の市民運動、保育園内の実践の特徴の 4 つの要因を踏まえて、設

定期、移行期を含めた 4 つの時期区分で整理した (表 1)。

民族保育では、在日コリアンの戦略的本質主義的な実践が焦点にあったため、保育実践はマイノリティへの働きかけに偏重する一方で、在日コリアンと日本人という「民族」が異なる人々の「共生」を前提にした相互理解や目的の共有が行われた。しかし、「民族保育」を通して在日コリアンの日本社会における立場や次世代に向けた教育実践を模索していたその途上で、ニューカマーと呼ばれる多様なエスニック背景の人々が増加し、多様性を前提とした包摂的な実践を目指す「多文化共生保育」への移行が促された。

「多文化共生保育」についても日本社会の中で合意があるわけでもなく、いまだに模索の段階にあると保育者は語る。新しい構成員との歴史の共有や継続的な実践の構築について、現在いくつかの困難に直面していることも明らかになった。ただし、在日コリアンの歴史的・社会

表 1 A 保育園を取り巻く歴史の変遷：4 つの時期区分

時期	年代	構成員	保育園の歴史的事象 (* 社会的事象)	保育者と家庭の関係	保育実践
設立期	1960 年代後半～	韓国・朝鮮人, 日本人	在日コリアンの民族意識の高揚	在日コリアン・地域の家庭の子育て支援	在日コリアン・社会的弱者の家庭の子どもを預かる
民族保育模索期	1970 年代～	在日・日本人	民族差別撤廃運動, 人権意識の高揚, 「共生・共闘」	家庭のエスニック文化 (特に在日) の継承	「民族保育」の模索, 日本人保育者の気づき, 統合保育
移行期	1980 年代後半～	在日, 日本人, 外国人	行政と市民の連携の活発化, 「共生」	各家庭の「多民族」文化を活動に導入	「民族保育」から「多文化共生保育」への移行, マイノリティの変容
多文化共生保育模索期	2000 年代～	在日コリアン, 日本人, 外国人, ニューカマー, 「ルーツ」	「多文化共生」の行政指針の制定へ	各保護者から学んだ「ルーツ」の文化を日常の保育に導入	「多文化共生保育」の模索, 多様性と複雑な保育ニーズの葛藤

*長江 (2022) からの引用

的文脈を引き継ぐ A 保育園として一貫して示す態度は、同化主義的なメインストリームへ抵抗し、マイノリティの可視化した上での多様性を尊重することである。

こうした A 保育園内で取り組まれてきた「多文化共生」であるが、A 保育園が「共生」を模索する様相から改めて顕在化した課題は、マイノリティの負担であった。つまり、マジョリティや社会構造の変容なく、特定のマイノリティに対して可視化したり立ち上がったりにように働きかける方策で「共生」を達成しようとするれば、マイノリティが社会の中で周縁化と同化を常に往還しなければならない状況に置かれるという厳しい結果を、現場の人々の声は物語っていた。

5 課題 2 : エスニシティ理解と実践

課題 2 の研究では、多様なエスニック背景の人々の共生を目指す事例の A 保育園でのフィールド調査に基づき、保育の場で保育者は多様性をどのようにまなざし、保育・教育実践を行っているかについて検討した。その際に、これまでエスニシティの本質主義的カテゴリーとされてきた「ルーツ」に焦点を当てている。

事例の A 保育園では、その半世紀の歴史の中でエスニック構成の変容がありながら、在日コリアンの戦略的本質主義によってマイノリティの可視化を目指す中で、ニューカマー移民を含めた多様なエスニック背景の人々を包摂するために「ルーツ」概念が構築されてきた。保育者

はその「ルーツ」によって、子どもの複数のかつ重層的なエスニック・アイデンティティを拾い上げようとしていた。また、「ルーツ」が実践に応用されることで、子ども同士の異文化理解や子どものホーム感を創造するような保育者の取り組みが引き出されていた。そうした実践は、同化主義的な日本の教育実践がメインストリームにある中で、実践現場に多様性を表現する方策を示しているように解釈できる。

さらに、本研究の知見の重要な点の一つに、「ルーツ」の構築主義的理解の可能性と意義が見出されたことがある。「ルーツ」にトランスナショナルな移動やネットワークを理解するための「ルート」情報が含意されることで、当事者のエスニック背景や移住経緯などを実践で重要な情報として保育者が理解する機会が生まれていた。これは、これまで批判されてきた「ルーツ」の本質主義的な理解ではなく、「ルート」概念に託されていた構築主義的なエスニシティ理解のあり方を「ルーツ」概念に付加した(表 2)。

6 おわりに

本研究では、近現代日本社会の移民集住地域として文化的に多様な人々の「共生」を半世紀にわたって模索する A 保育園に焦点を当て、現場の実践を検討することから保育における「多文化共生」を模索するためのいくつかの検討を行った。課題 1 として、事例の A 保育園の「共生」にまつわる歴史的背景を紐解くことをテーマにした研究と、課題 2 として、そうした歴史

表 2 「ルーツ」と「ルート」を通したエスニシティ理解

	ルーツ	ルート
先行研究	本質主義 (戦略的本質主義を含む)	構築主義
A 保育園のエスニシティ理解と実践	構築主義 (戦略的本質主義を含む)	

的変遷の中で構築された多様性をまなざす姿勢がどのように実践に表れているかを検討した研究を合わせて概観することで、保育領域で視点が欠落していた歴史的・社会的文脈を踏まえた「多文化共生」の保育実践の考察を目指した。

歴史の変遷を考察した研究からは、現在の多文化共生の課題は、それよりもっと前の在日コリアンの「共生」の課題と全く区別して考えられるものではないことが明らかになった。このことに加え、「多文化共生」を目指す上では、保育領域であっても、移民やエスニック・マイノリティに対する同化・排除の姿勢を続けてきた日本社会の構造的な問題を認識する必要があることが示唆された。

上記のように、歴史的背景を踏まえることで、多様性をまなざす姿勢を検討した研究において、在日コリアンの人々の葛藤を含みつつも、より多様な人々のエスニック背景を尊重する態度が保育実践の中で構築されてきた変遷を追うことができた。さらに、教育実践において一般的に本質主義的に捉えられてきた「ルーツ」には、構築主義的な理解が可能であることや、それだけではなく、マイノリティのエンパワメントとして「ルーツ」を表現する意義が見出された。

A 保育園を事例とすることで、保育領域においても移民やエスニック・マイノリティの歴史的・社会的文脈を踏まえた論考が可能なが示された。今後も、こうした視点を持って文化的に多様な子どもたちが参加する保育実践を捉えることが大切になる。本研究としては、A 保育園を事例として、「多文化共生」を目指した「多文化保育」を構築すべく、さらに実践を詳述していくことを目指す。

注

- (1) 国立社会保障・人口問題研究所 (2021) 『人口統計資料集 2021 年版』の「表 4-2 父母の国籍別出生数：1987～2019 年」を参考に、筆者が算出した。
- (2) 本研究が焦点を当てるのは、日本社会の移民やエスニック・マイノリティの社会的文脈を踏まえた「多文化共生」の議論だが、他にも異言語・異文化環境に育つ子どもの言語発達の様相や異文化適応について発達心理学研究の知見はいくつか提出されている (例えば、柴山 2002 ; 黄ほか 2018)。

謝辞

本研究は、事例として取り上げた保育園の協力なくして成立しない。協力いただいた保育園関係者の皆様に、改めてお礼申し上げたい。

また、本ワーキングペーパーは、CEDEP 若手研究者育成プロジェクト、及び、JSPS 特別研究員奨励費 JP1034363 の研究助成を受け、発表が予定されている二本の論文の知見を再構成するものである。本ワーキングペーパー執筆時点で、課題 1 の研究は 2021 年度『東京大学大学院教育学研究科紀要』(2022 年発行) へ、課題 2 の研究は『ソシオロゴス』(2022 年発行) へ掲載予定である。よって、本稿で記載された課題 1 と課題 2 の知見は、それぞれの研究論文の概要である。

参考文献

- Emerson, R. M., Fretz, R. I., & Shaw, L. L. (1995). *Writing Ethnographic Fieldnotes*. University of Chicago Press. (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳 (1998). 『方法としてのフィールドノート：現地取材から物語 (ストーリー)

- 作成まで』新曜社).
- ハタノ・リリアン・テルミ (2006). 「在日ブラジル人を取り巻く『多文化共生』の諸問題」植田晃次・山下仁編著, 『「共生」の内実: 批判的社会言語学からの問いかけ』, 三元社, 55-78 頁.
- 久富陽子 (2004). 「外国人の子どもと保育者とのコミュニケーションに関する一考察」, 『保育学研究』, 42(1), 19-28 頁.
- 伊藤るり (2009). 『「多文化共生」と人権: 日本
の文脈から』, 『学術の動向』 47-51 頁.
- 品川ひろみ (2011a). 「多文化保育における保育者の意識: 日系ブラジル人児童の保育を中心として」, 『現代社会学研究』, 24, 23-42 頁.
- (2011b). 「多文化保育における通訳の意義と課題: 日系ブラジル人児童を中心として」, 『保育学研究』, 49(2), 108-119 頁.
- 山田千明編著 (2006). 『多文化に生きる子どもたち: 乳幼児期からの異文化間教育』, 明石書店.
- 山脇啓造 (2009). 「多文化共生社会の形成に向けて」, 『移民政策研究』, 1, 30-41 頁.
- 渋谷真樹 (2013). 「ルーツからルートへ: ニューカマーの子どもたちの今」, 『異文化間教育』, 37, 1-14 頁.
- 萩原元昭 (2006). 「地域社会の中の子ども」, 『保育学研究』, 44(1), 12-21 頁.
- (2008). 『多文化保育論』, 学文社.
- 金命貞 (2003). 「在日外国人の学習権保障と地方自治体の役割: 川崎市『ふれあい館』設立要求運動を中心として」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 43, 365-372 頁.
- (2006). 「多文化共生教育の形成に関する一考察: 川崎市における地域実践を中心
に」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 46, 279-287 頁.
- (2011a). 「地域社会における多文化共生の生成と展開, そして, 課題」, 『自治総研』, 37(6), 59-82 頁.
- (2011b). 「多文化共生をどのように実現可能なものとするか: 制度化のアプローチを考える」, 馬淵仁編著, 『「多文化共生」は可能か: 教育における挑戦』, 勁草書房, 65-84 頁.
- 長江侑紀 (2022). 「文化的に多様な子どもを包摂する保育: 「共生」を模索する保育園の50年間の歴史から」『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 61: 297-308 頁.
- 高谷幸 (2021). 「移民・多様性・民主主義: 誰による, 誰にとっての多文化共生か」, 岩濑功一編著『多様性との対話: ダイバーシティ推進が見えなくするもの (デジタル)』, 青弓社.
- 柴山真琴 (2002). 「幼児の異文化適応過程に関する一考察: 中国人5歳児の保育園への参加過程の関係論的分析」, 『乳幼児教育学研究』, 11, 69-80 頁.
- 黄琬茜・山名裕子・榊原知美・和田美香 (2018). 「多文化保育における幼児のことは: 5歳児のコードスイッチングに着目して」, 『保育学研究』, 56(3), 174-185 頁.